



地球防衛娘

～生まれまくのでも同じなわきまのチキチキと過酷な戦況～

近年、突如現れた地球外生命体の襲撃によって、
地球は絶体絶命の危機を迎えていた

それに対処すべく立ち上げられた特殊部隊がEDFである

彼らは日々押し寄せる地球を脅かす脅威に、
命を顧みず立ち向かっている！





厳しい訓練を耐え抜き様々な試験を経て今年の内、
私は晴れて地球防衛軍通称EDFに入隊することが決まった

昔、小さかった時に街が異星人に襲撃され、EDF隊員に
助けられた思い出から、ずっと憧れを抱いてきた

友達も男もつくり、娯楽関係も断ち切って必死に
ここまで上り詰めてきた

ここまで長かった
夢がかなったという思いで
いっぱいだが、
これからがスタートである

精一杯頑張って
いこうと心に誓った

だが……この時の私は、
地球防衛軍での仕事がい
ろいろな意味で
大変だということを、
知る山もなかった……



地下から巨大な蜘蛛が出現したとの連絡が入った
(よりによって初任務が嫌いな虫の駆除とは思わなかった…)

現場に到着すると巨大な蜘蛛は縦横無尽に飛び回り
糸を吐きかけてくる

虫が苦手な私は、蜘蛛を避けるように飛び回っていたら
ビルの間で張られた蜘蛛の巣に引っかかってしまった
動けば動くほど糸が絡まり身動きが取れなくなる…

巣にかかった獲物を逃すまいと、
蜘蛛が這い寄ってきた
恐怖と生理的嫌悪感で
体が硬直し動けなくなる……

気が付けば口の前に
巨大な蜘蛛が迫っていた
体に覆いかぶさり
完全に動きを封じるため
手足を器用に糸で固定していく

足でパンツを引きちぎり
生殖器官のようなモノを
秘部に近づける
すぐには挿入しようとはせず、
クチュクチュと擦り付けてくる




「お願いしませうーお願いしませうー
お願いします!!!」
涙を流し震えながら訴えかける

「やめてえ!!!お願い!!
近づかないで!!!いやああ!!!」
懇願するように頼み込むが…

生殖器の先端が膣口に
触れたかと思うと
そのまま勢いよく
ズブツ!!!
と処女膜を貫通し
挿入されてしまった





痛みとショックのあまり
口を見開いて口を
パクパクとさせる
言葉が出ない
「あつ……あつ……」
私の初めてをこの
おぞましい巨大クモに
奪われてしまった……

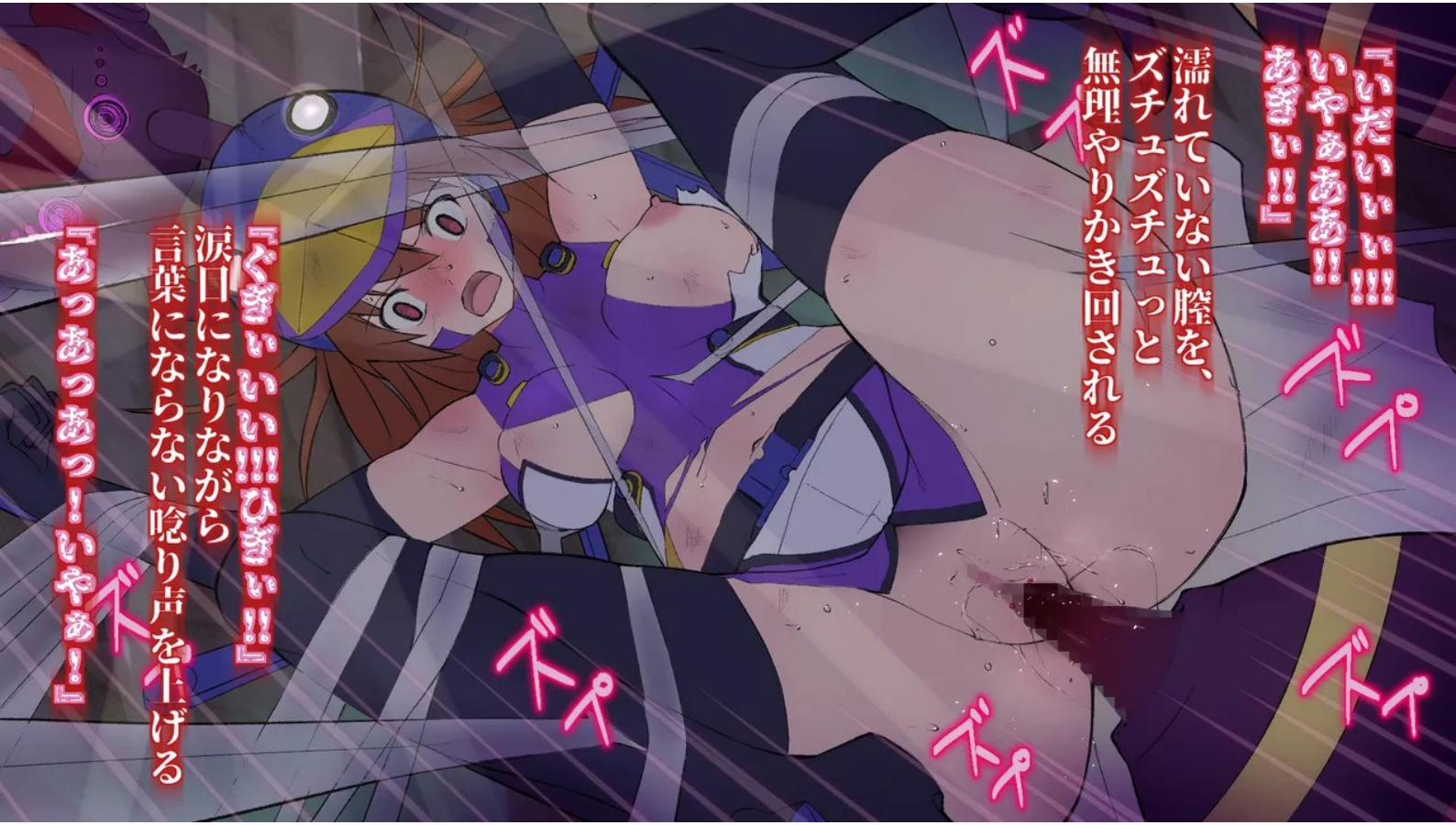
虫に言葉は通じない、
叫び声を上げ罵声を
浴びせたところで意味もなく
お構いなしに激しく動き始める

「いだいいい!!!
いやあああ!!
あきい!!!」

濡れていない腔を、
ズチュズチュッと
無理やりかき回される

「ぐわんぐわんぐわん!!!」
涙目になりながら
言葉にならない唸り声を上げる

「ぐわんぐわんぐわん!!!」



無線で私の喘ぎ声が
本部に筒抜けに
なっている事に気づいた
「いやあ……聞かないでえ
……んああ！」

情けなくも、先ほどまで
希望を持つよう
呼び掛けていた上官も
掛ける言葉が
見つからないのか
黙っている……

「あつあつ！だめ！
無線で！聞かれちゃうちゃう！
私のお！あつ喘ぎ声！
き、聞かないでください！！
はあああ！！んあああ！！」



しばらくピストンを
続けていた蜘蛛の
動きが速くなる

「はっ！はっ！はっ！はっ！
え？や、やだ…もしかして
私の中に出しちゃうの？」

「お願い！！
お、お願いだからあああ
くうんっ！！
だ、出さないでへえ!!!
中に…中にはあああ!!!」

願いもむなしく蜘蛛の動く
スピードは上がっていき、
ついには…

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ


ビュルルルルツ!!!
と熱い液体が勢いよく
中に発射された

「いやあああああツ!!!」

複数のクモが順番を
待っているように
周りを取り囲んでいる
こいつらには
繁殖行為でしかないのだ

私はこれからどうなって
しまうのだろう
頭の中が真っ白になっていく……

ビュルルルル

The background features a central point from which numerous light rays radiate outwards, creating a starburst effect. The rays are composed of many fine, overlapping lines, giving a sense of depth and brightness. Scattered throughout the scene are small, white, star-like particles, some of which appear to be part of the radiating light. The overall color palette is a mix of white, light gray, and dark gray, with a slight purple tint in the text.

これからずっと蜘蛛の苗床として
生きていくのかと絶望していたところ

増援部隊が到着し蜘蛛は殲滅、
蜘蛛の巣に捕らわれていた隊員も
無事救出された。。。

前回の件もあり、虫の駆除以外の任務に回してもらった

今回は巨大な蛇型モンスターが街中に出現したらしい

上官に後衛での補助を任されたが
『私に任せてください!前回は苦手な虫だったので
あのような失態を見せてしまいました私でも戦えます!!!』
と早口で言い、前回の失態を挽回しようとした

が、勝手に前に出過ぎた結果、体を吞まれてしまった...

他の隊員は私が
呑み込まれかけているので
うかつに攻撃することができない

完全に
呑み込まれて
しまったら
生きたまま
消化されて
いくのを
待つことに
なるだろう……

口内の肉に挟まれ、
狭く息苦しい……
ぬらぬらとした肉壁が
私を飲み込もうと
奥へ押し込むように
うねうね動いている
私は完全に呑まれまいと
必死があがく



口内は蒸せるように熱く
ねちよねちよとしていて、
肉が腐ったような
甘ったるい吐き気を催す臭いがする

「ラッ！」
思わず嗚咽が
漏れる

「くそっ！」
だせ！
吐き出せ！
化け物め！」

涙口に
なりながら
必死で
もがき暴れる、
だが後に
なって後悔する

呑み込まれないように
踏ん張っているが
死の恐怖で失禁しそうだ……
じわじわと服が
溶けてきている
いずれ私の体も溶かされて
しまうのだろうか……



モンスターは体内は酸素が薄く、
暴れば暴れるほど酸欠になり
息が苦しい頭が回らない
ねっとりとした肉壁が体に絡みつく

はじめに無駄に
あがきすぎた
せいで体力を
使ってしまった
声を出せば
出すほど酸素が
薄くなる

迫ってくる
肉壁を
押し返す力も
尽きてきた

押しつぶされ
そうだ……

モンスターは、なかなか
呑み込めないとわかると
私の体をまるで飴玉でも
転がすように、
モゴモゴと口を動かす



すると私の体はくちゅくちゅと
肉壁にもみくちゃにされる
口の中で舐め溶かしてしまおうと
しているのか

「このままの
中で骨まで
溶かされて
終わりか……」

「くわ……
くわいよ……
はあはあ……」

隊員に救出されなかったら
見捨てられてしまったら
心臓がはち切れそうなくらい
鼓動する
絶望的な状況だ

少しずつ奥へ吞まれていく
恐怖、迫りくる肉壁……



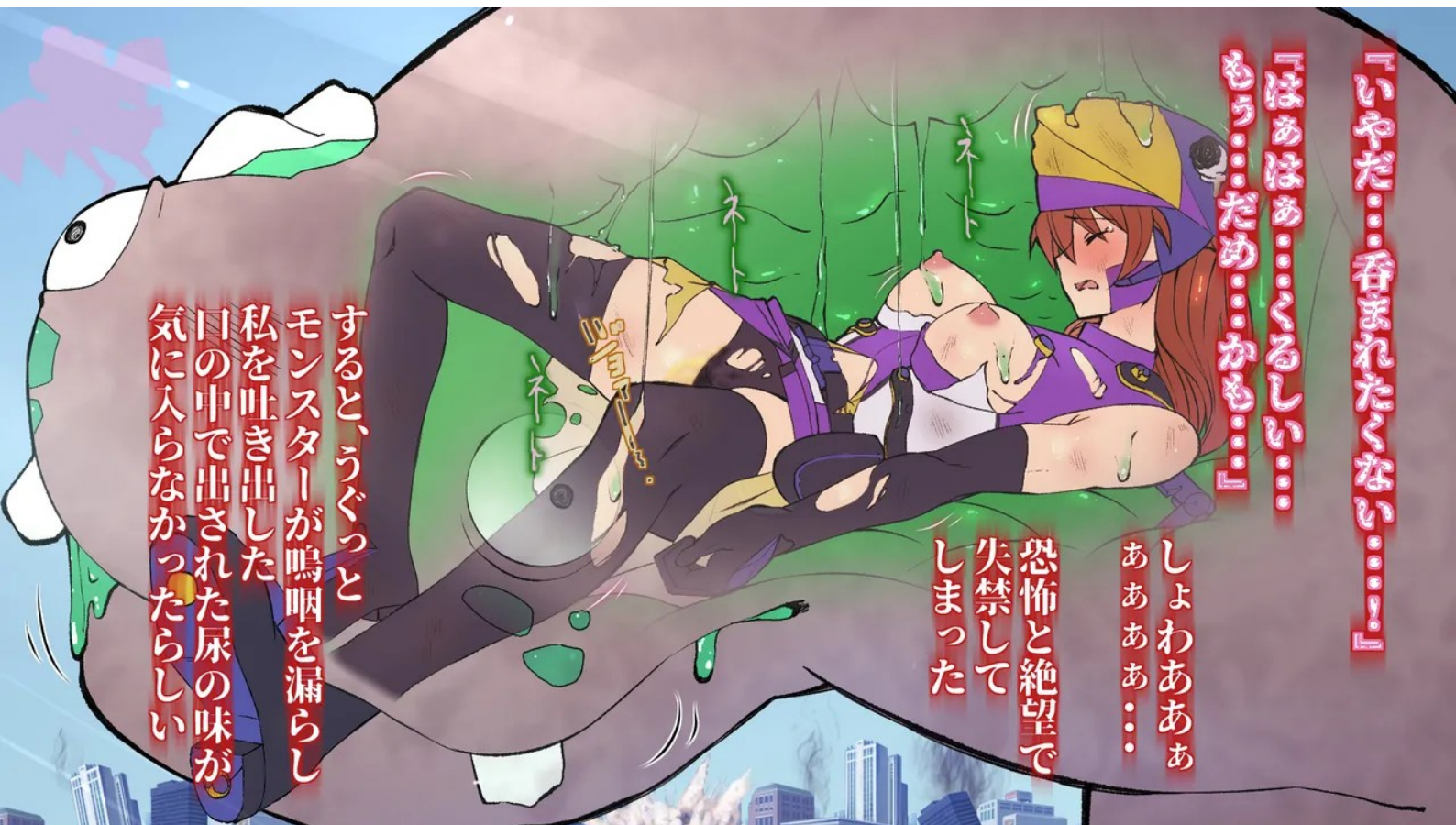
「いやだ……吞まれたくない……!」

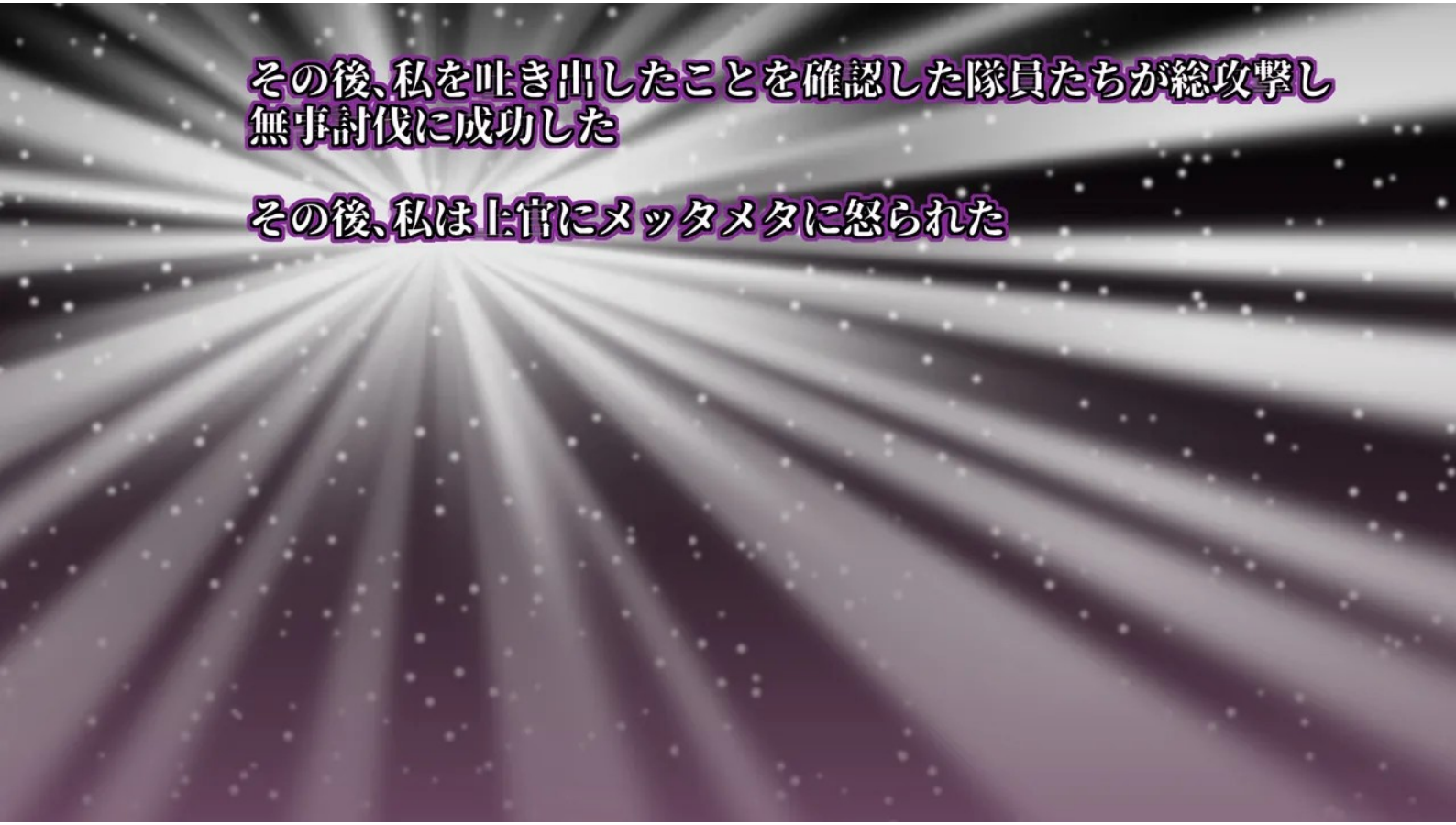
「ほあほあ……くるしい……
もう……だめ……かも……」

しよわあああ
ああああ……

恐怖と絶望で
失禁して
しまった

すると、うぐっと
モンスターが嗚咽を漏らし
私を吐き出した
目の中で出された尿の味が
気に入らなかつたらしい





その後、私を吐き出したことを確認した隊員たちが総攻撃し
無事討伐に成功した

その後、私は上官にメッタメタに怒られた

空から隕石のようなものが飛来し街の中心部に落ちたらしい
一般市民が近づいて見てみると
巨大な宇宙船のようなものであることが分かった

調査部隊が出動したが、
移動中に宇宙船のようなものから足が生え
動き出したとの連絡が入った

EDFが出動し現場に到着すると巨大なロボットは
アームのようなもので一般女性を捕まえ檻に放り込んでいた

すぐさま隊員が攻撃に入るも、強力な電磁パルスのようなもので
ウィングや電子兵器などの装備品が使えなくなってしまった

一時撤退しようとするも、装甲車などの移動手段も絶たれ
次々と隊員も捕まってしまい私も逃げ切れず捕まってしまった・・・

檻の中に入れられたが男性隊員の姿はない
敵の目的はわからないが、
女性ばかりを捕獲しているらしい

「私たち、これから
どうなっちゃうん
だろぅ……」と、

パニックになり
泣き出したり、
助けを求めて
叫びだす

一般市民を
落ち着かせるために
励ましたりしていると

口のように監視する
カメラのような
ロボットが私たちが
確認すると
左右の噴射口から
謎のガスを
噴き出してきて
私たちは気を失った……



気づいたら宇宙船の中にいるようだった
手足は拘束され診察台のような所に
大股を開いて座らされていた

下半身はパンツを身に着けておらず
恥ずかしいところがすべて見えてしまっている

両足は閉じることができないようにしっかりと固定され
恥部とお尻の穴に、巨大な男性器のような形をした何かが
くっついた機械があてがわれていた

周りには映画などで見かけるグレイ型宇宙人のような奴らが
私を中心に取り囲んでいた

私の頭には脳波計のようなものが
付いている
それは大きな謎の機械を通して
周りにいる宇宙人にも取り付けられていた

捕まった女性たちも
同じような状況なのだろうか

「何なのよ!! あんた達は!!! 目的は何!!
私たちは人質? 実験材料?
なんで女性ばかりを捕まえているの!!
拘束をほどこさないよ!!!」



喚き散らすように言々と
一体のグレイ型宇宙人が
片言な日本語で話し始めた

『オマエラ、
ニンゲンハ、
マタノアイダノ、
セイシヨクキカン、
デ、ボウダイナ、
カイラク、ヲ、エル』

『ワレワレモ、ソレガ、
ドノヨウナ、
カンカクナノカ、
シリタイ！』

『コレハ、チキユウジンノ、
ダンセイノ、セイキラ、ケンキユウシテ
ツクラレタ、トクベツナ、マシーンダ』

『ジヨセイノ、ヨワイブブンヲ、
キヨクゲンマデ、シゲキ、スルヨウニ、
デキテイル！』

『○!※□◇#△!』

異星人は自分たちの星の言葉で命令を出し、機械がウィーンと音を立てゆっくりと動き出した

「や、やめるッ
これを外せッ
!!!!!!」

ぬぷッ!

ゆっくりと
腔にモノが
挿入されていく

モノには
ぬるぬるとした
液体が塗りつけ
られていたため
すんなり入った

「やあッーんんッー」

くっちゅくっちゅ、と音を立てながら
ピストンを始める
ぬるぬるとした液体は

媚薬効果があるのか
ジンジンと子宮の奥が熱くなっていく

ゴウンゴウンと唸るような音を上げ、
動きが段々と早くなる
私も声を抑えることができなくなってきた

「んはッ！
はあッ！
はッ！
はう…はああ
あッッッ!!!」

宇宙人たちは
「◎△\$♪×¥●&%#?!」と、
驚いたような言葉を交わしている。
女性の感じる快樂に
戸惑っているようだ



マ○コに挿入されたモノの速度が一定に達すると、お尻の穴にももう一つのモノが挿入された。そちらにもゆぶツッ！にゆぶツッ！とゆっくり動き出す

腸内に異物が入っているのが気持ち悪い

突かれるたびと嗚咽が漏れる

「うッッ！
うぐッッ！」

だがその気持ち悪さもだんだんと快楽に変わっていく。アナルがジンジンし、もっと激しく動いてほしいという切なさに襲われる

「だ、だめーおっーおかひんー！
なっっちゃううう！！」

ズドドドド！と膣とアナルを
交互に突いてくる
突かれるたび私の膣は
噴水のように潮を吹きだし

「あッ！あッ
！熱い！
お〇んこが
熱いよお！
溶けちゃ
うううや
誰か止め
てえええ
いやあ
あああ
!!!」

異星人も快楽が共有されているため、
のたうち回りながら悶えている
もうこの機械を止めることは
誰にもできなかった



何度か絶頂に達してやっと機械は動作を停止したらしい
気づいたら汗だくで様々な汁で部屋はめちゃくちゃになっていた

しばらく放心した後周りを見てみると、私の感じる快樂に耐えきれず
脳がショートしてしまったかのようにぐったりと倒れ込む
宇宙人どもの姿があった

異星人は股間から謎の体液をまき散らしながら
ビクンビクンと痙攣していた
意識は飛んでいるらしい

どうやってここから脱出しよう・・・とぼやけた頭で考えていたら
しばらくして救助隊が来た
捕まっていた女性は助け出されたらしい
他の部屋でも同じように、倒れ込む宇宙人の姿があった

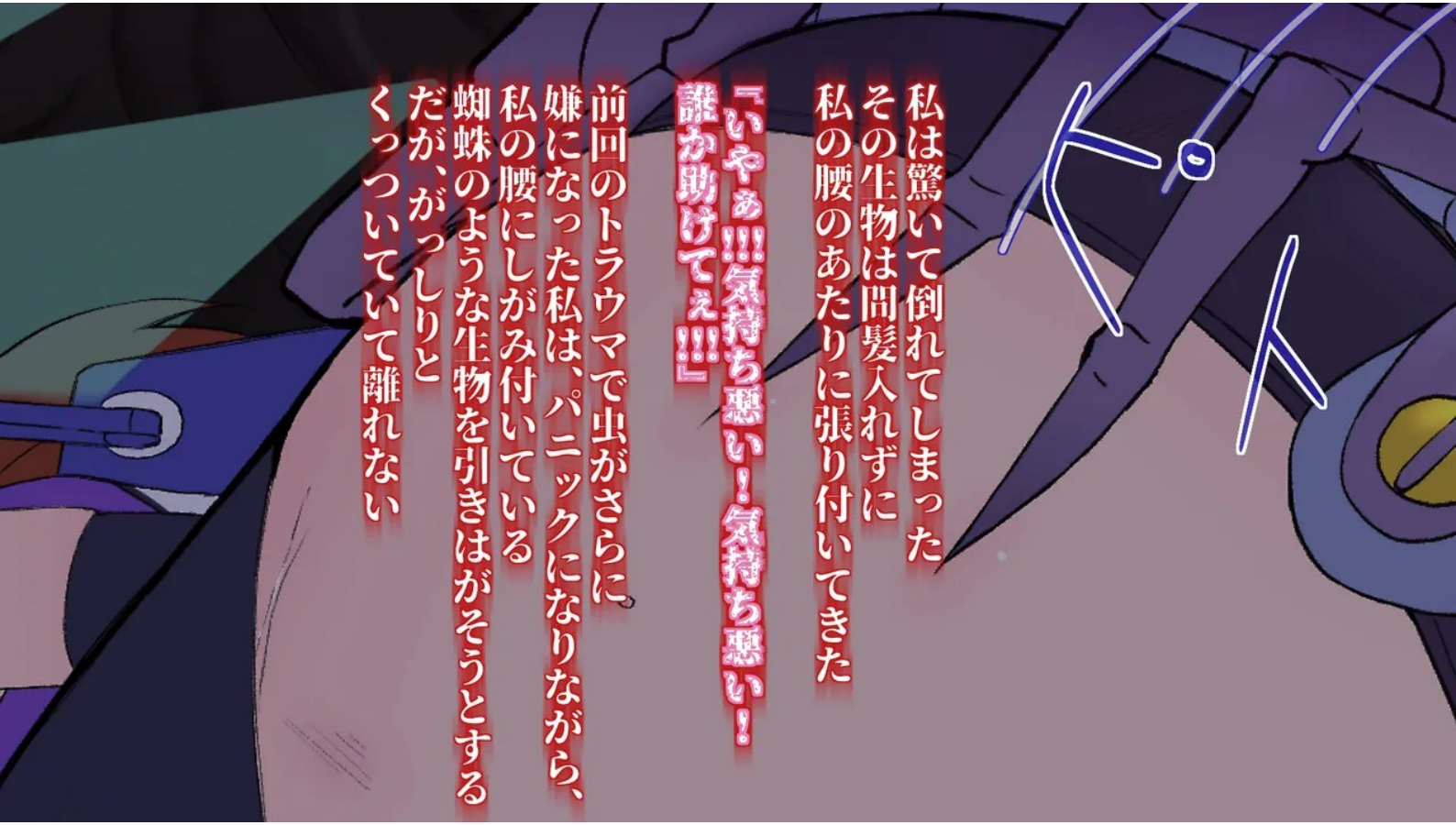
この宇宙人どもは研究機関に回されるらしい

地下通路に人の顔ほどある大きさの卵が見つかったらしい
私たちEDF隊員達はその卵の駆除とサンプルの採取を任された

現場に着くと思っていたよりも多くの卵が産みつけられていた

固い卵の殻というより肉肉しくて
脈を打つようにドクンドクンと蠢いている、気持ちが悪い……

じっくりと観察していると卵のてっぺんが
グパァッと開き中から蜘蛛のような生物が飛び出してきた!



私は驚いて倒れてしまった
その生物は間髪入れずに
私の腰のあたりに張り付いてきた

「いやあ!!!気持ち悪い!気持ち悪い!
誰か助けてえ!!!」

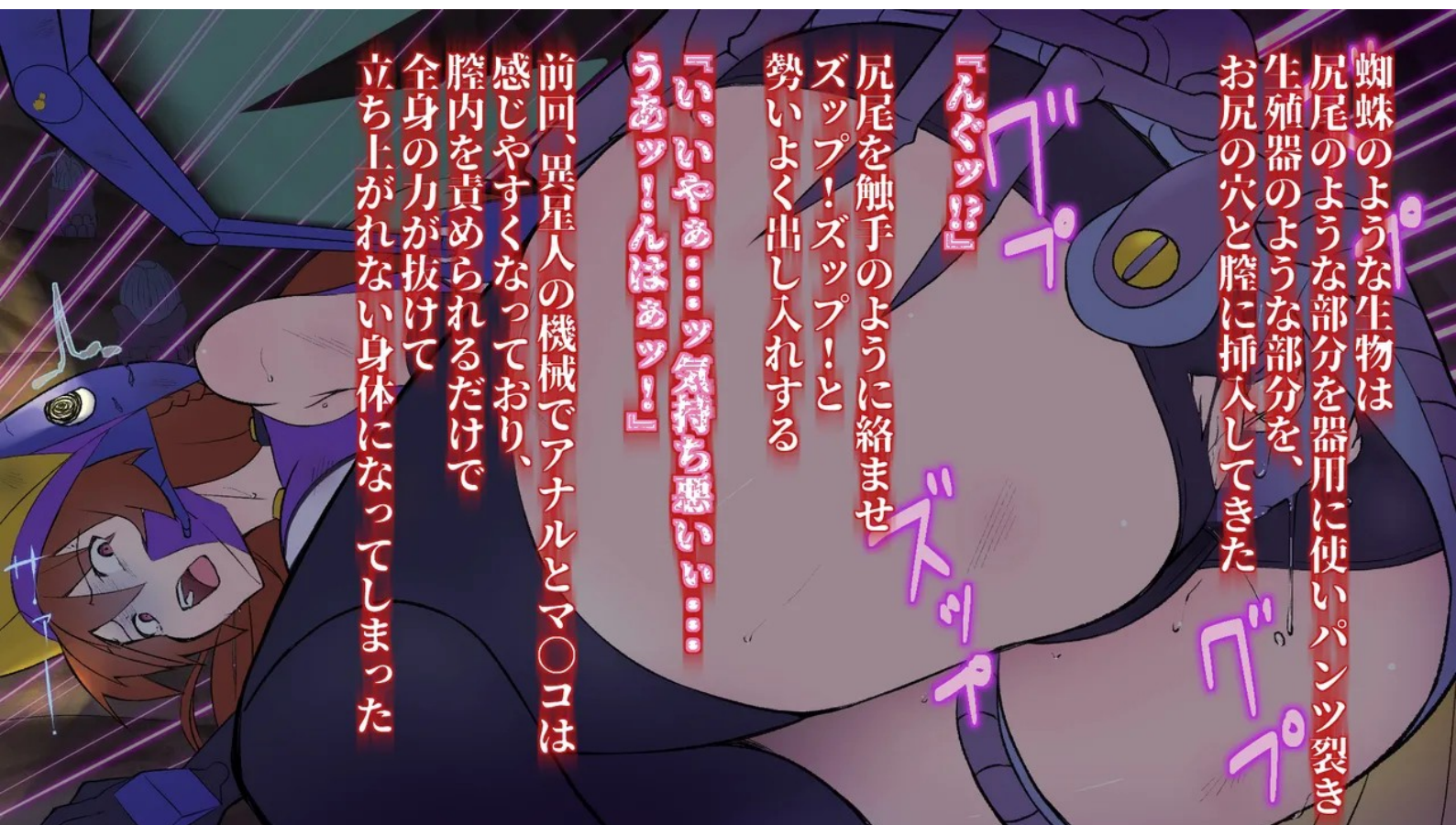
前回のトラウマで虫がさらに
嫌になった私は、パニックになりながら、
私の腰にしがみ付いている
蜘蛛のような生物を引きはがそうとする
だが、がっしりと
くっついていて離れない

蜘蛛のような生物は
尻尾のような部分を器用に使いパンツ裂き
生殖器のような部分を、
お尻の穴と腔に挿入してきた

尻尾を触手のように絡ませ
ズップ！ズップ！と
勢いよく出し入れする

「いいやあ…ツ気持ち悪い…
うあッ！んはあッ！」

前回、異星人の機械でアナルとマ〇コは
感じやすくなっており、
腔内を責められるだけで
全身の力が抜けて
立ち上がれない身体になってしまった



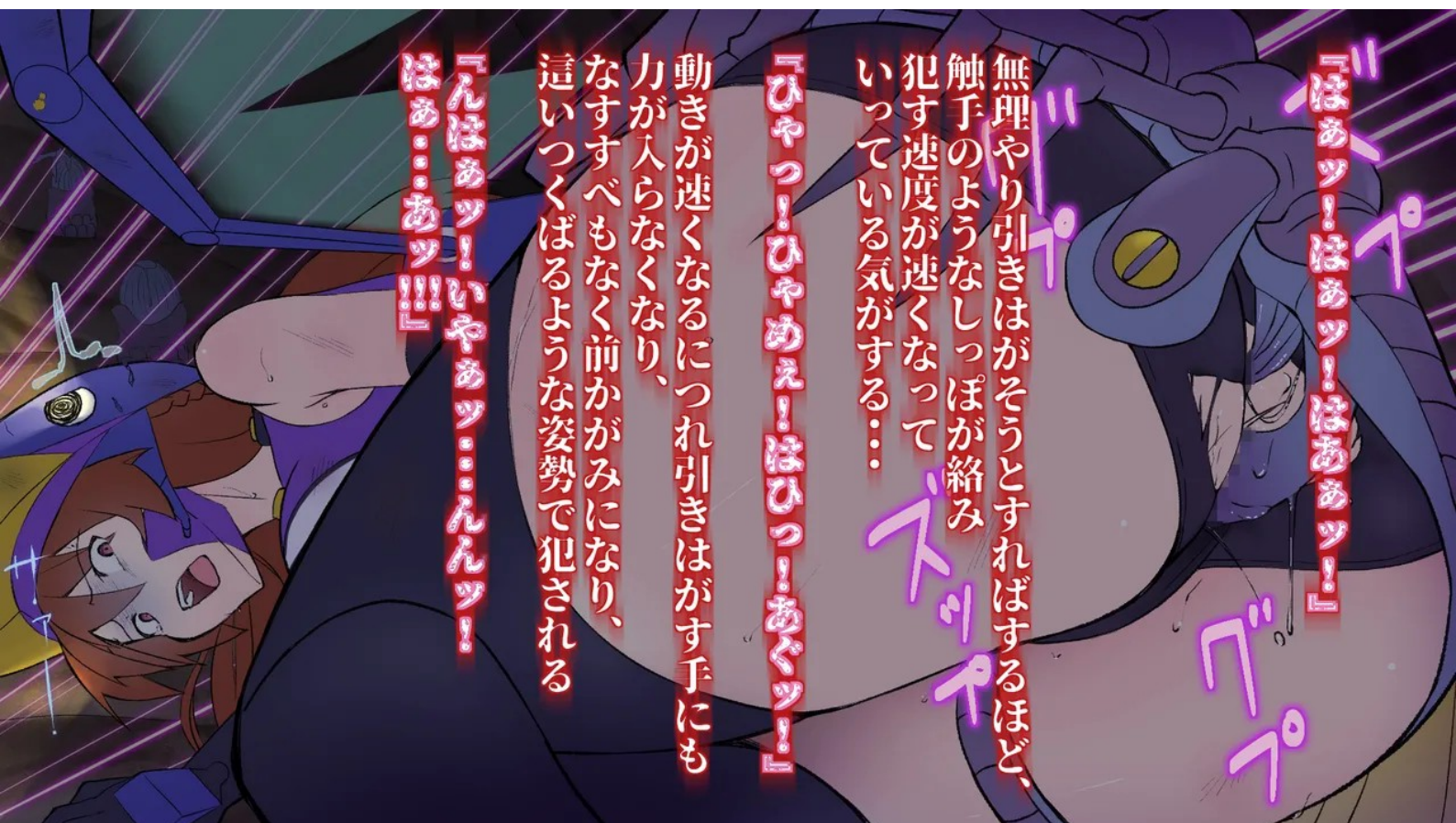
「はあッ！はあッ！はあッ！」

無理やり引きはがそうとすればするほど、
触手のようなしっぽが絡み
犯す速度が速くなって
いっている気がする……

「ひゃっーひゃめえーはひっーあぐッ！」

動きが速くなるにつれ引きはがす手にも
力が入らなくなり、
なすすべもなく前かがみになり、
這いつくばるような姿勢で犯される

「んはあッ！いやあッ……んんッ！
はあ……あッ!!!」

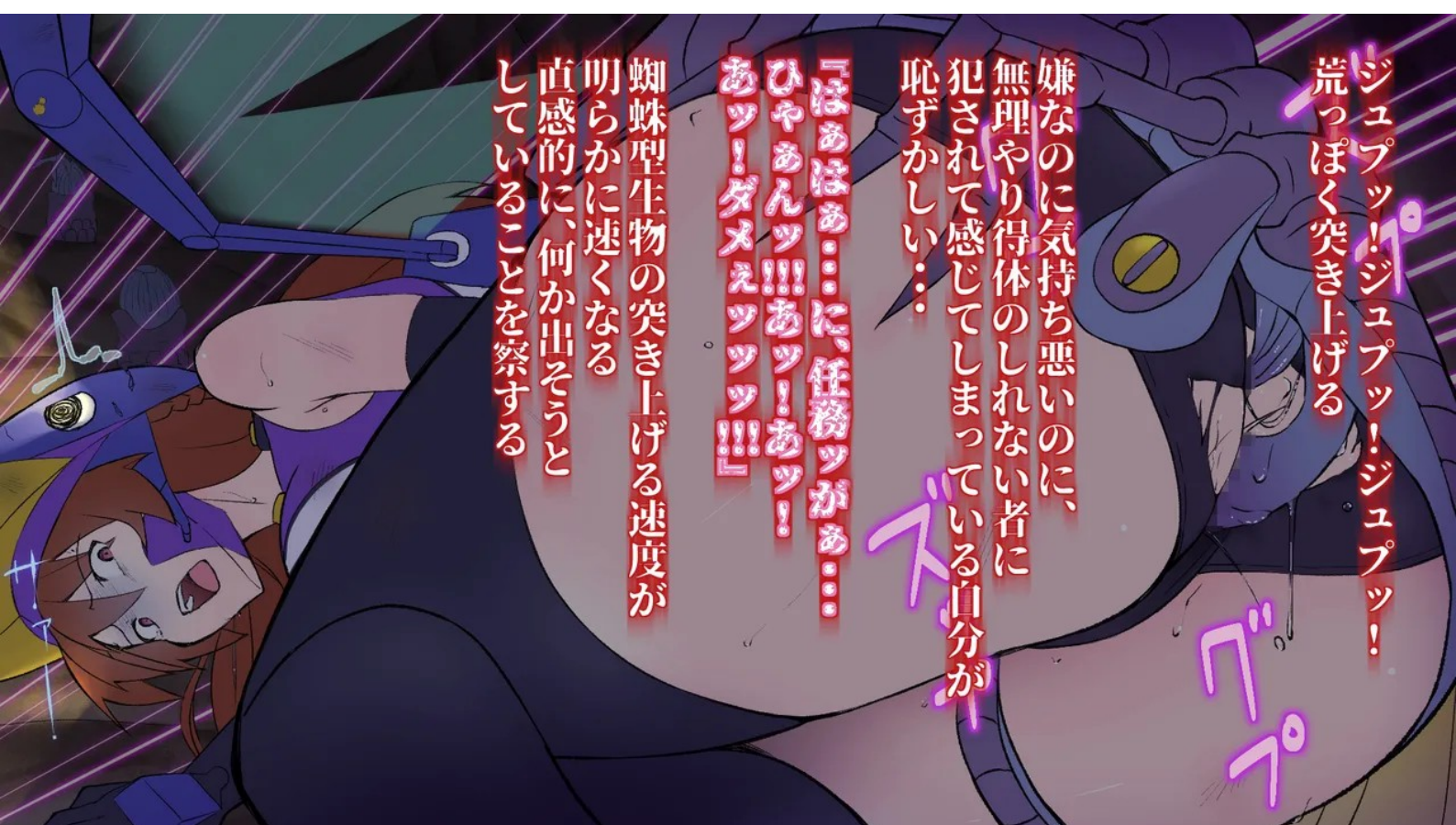


ジュプツッ！ジュプツッ！ジュプツッ！
荒っぽく突き上げる

嫌なのに気持ち悪いのに、
無理やり得体のしれない者に
犯されて感じてしまっている自分が
恥ずかしい……

「はあはあ……に、任務ッがあ……
ひゃあんツ!!!あツ!あツ!
あツ!ダメえツツツ!!!」

蜘蛛型生物の突き上げる速度が
明らかに速くなる
直感的に、何か出そうと
していることを察する





「あッ!あッ!あッ!あッ!あッ!
な、なにか出しちゃうの……?
だ、だめ中に出さないで!!!
あッ!!!いやあ!!!」

ぶびゅッ!びゅるるるるッ!!!
体液を中に出してきた

『いやあああああ!!!』

体液を出した蜘蛛のような生物は、
果てたかのようにポロっと剥がれ落ち、
死んでしまった

その後、私は研究機関に回され、
腔の中に入った生物の体液を抽出された
恥辱的で恥ずかしかった・・・

上官から大事な話があると言われて個室に私一人呼び出された
「実はこのEDF内に擬態した宇山人が居るみたいなんだ…」
深刻な表情で言われ、突然んの事で動揺しつつも聞き返した
「そ、それは誰なんですか!？」
しばらくの沈黙があった後、上官はこう言った

「それは…私だよ…」



上官に擬態していたのは
タコ型宇宙人だった
触手がシユルシユルつと私の手足に絡み、
私はあつという間に拘束されてしまった

思ったより触手の力は強く
身動きが取れない

『いやーやめて!!!変態タコ野郎!!!』
『ム、ムグ!おアツ!』

必死に抵抗するが
タコ型宇宙人は煩わしそうに怒鳴った

『うるさい奴めッ!!!』

助けを呼ぼうとしたら複数ある
触手の一本が口の中に入り込み
喉の奥まで入ってきた



全身をまさぐるように触手が動く
じつくりと私の体を観察しているようだ

『どこだあ……ここか？
それともここかな？』

耳の穴をクチュクチュといじり、
首筋から背筋へ触手を這わせる
ピンピンに勃起した乳首を
クリクリといじる
お尻を撫でまわすように触手が動く

至る所をいじられるたび体が
ビクンッ！ビクンッ！と反応してしまう

『はははっ！面白い！
すべてが弱いではないか！』





『データによればこのクリトリスという
陰核を責めれば力が弱まると聞いた』

『ここを責め続けければ地球人の
知能レベルは低下し』

『何もできなくなってしまうという！』

『ここが弱いのかニンゲンよ！』

『もっと責め立ててやろう！ふははは！！』

『はあんツ…いやあ…やいや』

『いじらないでえ…』

『甘い声が漏れてしまう』

『ふふふっ…苦しいかニンゲンよ！』

『やめてほしければ
秘密をすべて吐いてもらおうか！』

アム





「ふあっ…んんッ！」
「いやあ…はあ…はああ…」

「ぐううらんッ!!はあんッ!!」

私の体を分析するように
触手を這わせ様々な所をいじってくる

「おお気持ち悪い、変な声を上げおって
下等生物ニンゲンがッ！」

「いやあ…ダメえ！イ、イっちやううう!!!」

「イクというのは何だ!
どこに行くというのだ!
こやつ知能が低下しすぎて
意味不明な事を言い出したのか?」

「アール」



『はははっ！』

さっきまでの威勢はどうしたッ！

ニンゲンの女とはこうも弱い

ものなのだな！どうだ苦しいか！

もっと責めてやろう…！』

触手の動きを速める

『だめえッ！』

そ、それ以上したら出ちゃうう…！！』

『今更何が出るというのだ！』

隠し兵器か？

出せるものなら出してみる！』

ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくツ！！
どんだん動きが速くなり
子宮を責め立てる

ブル

限界に達し潮を噴水のように
吹きながらイってしまった

プシヤアアアアアアアア……!!!

絶頂に達すると同時に
潮を勢いよく噴き出してしまった

それを浴びたタコ型宇宙人は

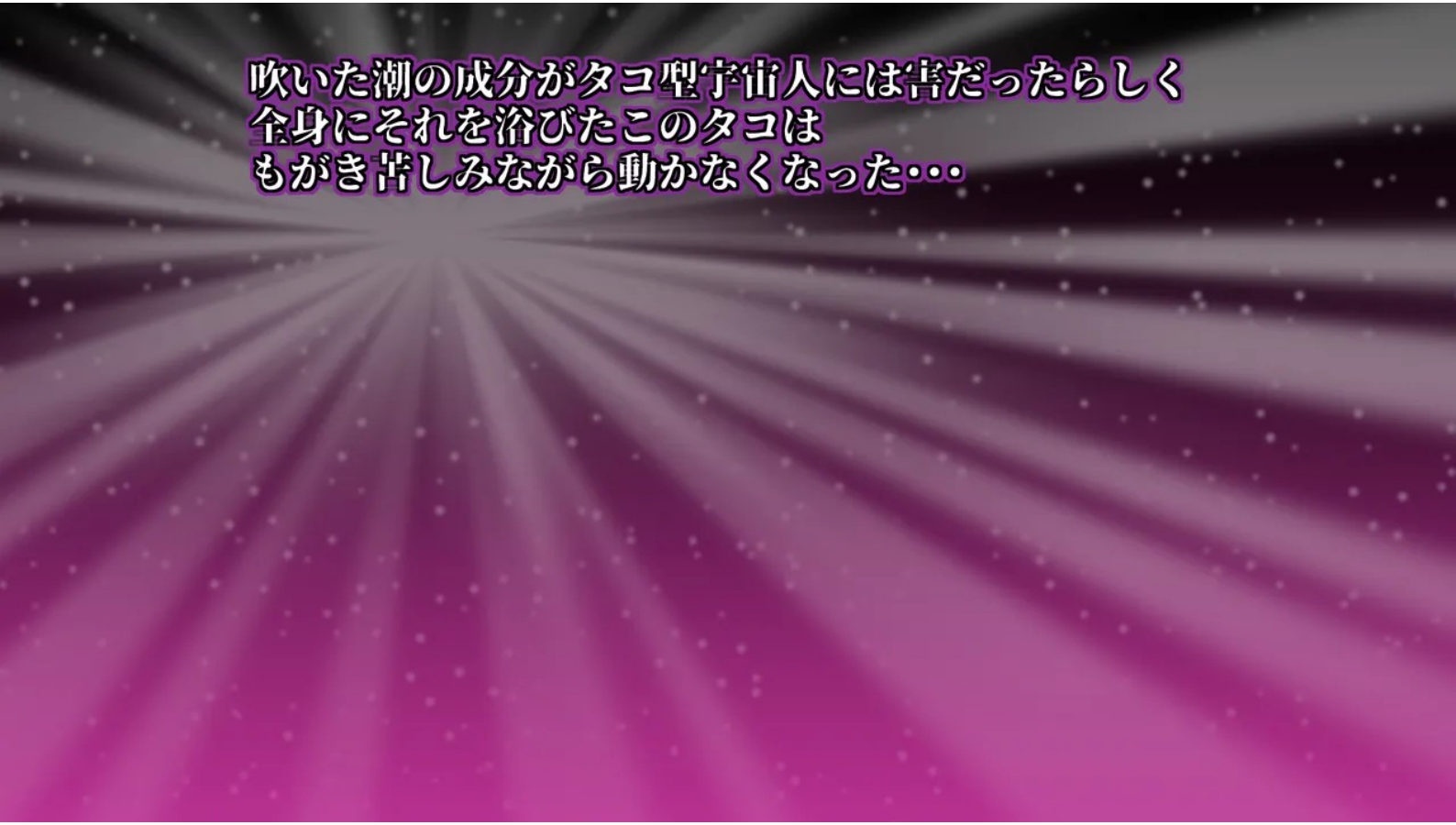
『う、うぎやああああああ!!!』

『な、なんだこれは地球人には
このような攻撃方法があったなんて』

『ぐっぐわあああな、なんだこれはあああ!!!
いきい!!!痛いッ!痛いッ!!!ぐおおお!!!』

『なぜだ!聞いていないぞ!?!
このような危険な体液を
吹きかけてくるなぞ!!!』



A purple starburst background with rays emanating from the center, set against a dark purple field with small white specks.

吹いた潮の成分がタコ型宇宙人には害だったらしく
全身にそれを浴びたこのタコは
もがき苦しみながら動かなくなった・・・

今回の侵略者は厄介らしい、
話が通じず野蛮な宇宙人ということだ
すぐさま出撃命令が出た

現場に到着するとそこには、
全身毛むくじゃらでなまはげのような見た目をした巨漢がいた
皮膚が固く銃弾が通らない

激しい戦いの末私たちは捕まってしまった…
なぜ、すぐに私たちを殺さなかったのか
捕まえた隊員たちを一か所に集め見張っている

すると、巨漢たちはそれぞれ女性隊員を選び
抱きかかえどこかへ連れていく
(少ないが男性隊員達も連れていかれている…)

私も一体の巨漢に選ばれ連れていかれる
他の巨漢たちがいない場所に連れてこられたかと思ったら
おもむろに股間についている巨大なモノを出した…

『まさか、私たちを犯してから一掃しようとしているの…?』

ソレはピンピンにいきりたち、
別の生き物のようにビクンビクンと凶暴に暴れていた

『ちょ、ちょっと待って!
うそでしょ!?!ソレを入れようって言うの!?!』

パンツを剛腕で軽く引きちぎり、
そのデカブツを私の秘部にあてがう
そして、私の膣をつかみ無理やり押し込んでいく…

「そんなの入らないよお!!!
ぐッ!ぎッ!いやああああ!!!」

にゅぐ…ぐちゅ、ズブツ!!!

前戯もなく乱暴に
挿入してきたデカブツは
私の腔を容赦なく押し広げ
子宮を突き破らんとするほど
奥まで入ってきた…

「ギイツあくうラカハツ!」

痛みもあるが
あまりの大きさに
苦しくて息がうまくできない…

巨漢は両手で私の胴体を
しっかり掴み、
オナホを抜うかの如く
上下に動かし始めた





「痛いッ！」

「あがッ！」

うぐぐッ…かはっ！

はあはあ…！」

ズップズップ！

段々と動きが速くなる

「あー…あー…あー…」

突かれるたび不意に

声が漏れてしまう

他の女性隊員たちもおそらく

別の巨漢に犯されているのだろう

「いやあッ!!!あぐらッ！」

んぐッ!はあッんあッ!!」

周りから苦しさと快楽が

合わさったかのような

うめき声のような喘ぎ声が

聞こえてくる

だが周りのことを
気にしている余裕はない
頭の中はこのデカブツのこと
だけになっていた

「らめえーいやらあッ!!
れかすぎるうッッッ!!!
んはあッ!!!」

私は、嫌悪感や屈辱感とは
裏腹に体が喜んで
しまっているという現実を
受け入れたくなかった……

体を完全に支配され、
乱暴に扱われる今の現状が
この絶望的な状況が
脳に刺激を与え、
腔からはとめどなく
愛液があふれ出てくる

幾度となく危険な状況にさらされ犯されてきた私は普通のエッチじゃ満足できない体にされてしまっていた

「あらまが、おかひぐらう!!
なっちゃッッッ!!!
う……あう……」

じゅぷ!ぐりゅ、ジュツク!
ジュツク!ジュツク!

滑りのよくなった私の腔を
乱暴に上下させる

周りの事は気にせず、
恥じらいもなく喘ぎ声を上げる

「あッーあッーあッー!
もっらめ、もっらめえ……はひど……」



この満たされる感覚、絶望の先にある快樂
体は喜び満たされ、頭の中は真っ白になり、
私は失禁しながら気絶した

目が覚めたら防衛本部にある病室にいた
その後、散々出して呆けている巨漢たちの
スキを狙って奇襲をかけ、なんとか全員救出されたらしい


しばらく安静にしているように言われた
だが頭の中はあの時の
とてつもない快樂の事でいっぱいだった…

仕事を終え、シャワーで泥と汗と異生人の体液を洗い流す
この時がホッと一息つける瞬間だ

シャワーを浴びながら今までのことを思い返す
入隊してから色々な事があった、主に性的な意で…

最近では段々と仲間との連携も取れてきて
失敗することもなくなっている

でもなぜだろう…任務は成功しているのに
なにか、ぽっかりと穴が開いたような虚無感は…



物思いにふけっていると、ふと背後から気配がした。振り返ろうとした瞬間、強い力で腕を押さえつけられ、身動きが取れなくなってしまうた

「ぐっ！油断した！」

ナイフを首元に突き付けられ、少しでも抵抗したり、大声を出そうものなら、容赦なく首を掻き切られるだろう。

異星人がまさかこの基地内部に潜入しているなんて…。光学迷彩で隠れ、無防備になるこの瞬間を待っていたのだろう。

ボロンッ!

人型の異星人は

何故かおもむろに

股間から性器と思われるモノを出した

ソレはビンビンに勃っており

ビクンビクンと凶暴に暴れていた

(えいっ!それから身を)

犯そうとしているの……)

何故だか胸が高鳴る

「や、やめろ……いやだ……」

違うと信じたのに

嫌だと口では言っているのに

私の股間は情けないことに

興奮でぬらぬらと

よだれのように汁を垂らし

おいしそうなモノを

啜え込みたいと待っている



声
が
漏
れ
な
い
よ
う
に
押
さ
え
つ
け
ら
れ
ズ
ブ
ッ
！
と
挿
入
さ
れ
て
し
ま
っ
た

「**グウツツツ!!!**」

ド

ズ
ン
ッ
！
ズ
ン
ッ
！
と
大
き
く
て

凶
暴
な
モ
ノ
で
突
か
れ
る
た
び

子
宮
は
よ
ろ
こ
び

膣
か
ら
は
愛
液
が
あ
ふ
れ
出
て
く
る

「**なんで…んんツッ!**

いやあツッ!なんでえツ!!!」

(**嫌だ!!!なんで!!!**

もつと突いて乱暴にめちゃくちゃに!!!)

隊
員
と
し
て
の
プ
ラ
イ
ド
と、

め
ち
ゃ
く
ち
ゃ
に
さ
れ
た
い

気
持
ち
が
せ
め
ぎ
合
う

ズッ



「もう入らないよおお!!!」

お願いは通じない…
言葉が通じているのかもわからない
戦闘服のようなものを
身に着け表情が見えないから
何を考えているのかもわからない
恐ろしい

「あッーあッーはッー」

「はあ…んあッ!!!」

「また、イッちやうつッッ!!!」

「はあ…はあ…はあ…はあ…もうためえ…
もうイケない…もうらめ…
もうイキたくない!!!」



ズブッ!!!

『ひゃあうッ!やだぁ!!!もうイキたくないのにいいいッ!!!』

『ほうッ!はあんッああん!へはぁ…!』

『はあんッ!はあんッ!はあんッ!』

何度犯されたのだろう、何度イったのだろう
もう、何もわからなくなってきたころ、
人形異星人は犯すのをやめた

弱り切ってぐったりしている私に何かを吹きかけた
昏睡スプレーだったのか意識が遠のき
目の前が真っ暗になった…

気づいたら宇宙船内部にいた
前回にも同じような事があったが
今回連れ去られてきた船内は、
肉々しくドクンドクンと脈を打つように動いている
まるで船が一つの生命体の川だ
私は繭のような所に入れられていて、
全裸で手足が肉の中に埋まっていた

あの人型宇宙人に連れてこられたのだろうか…

当然のことながら身動きが取れない
意識が混濁していて、
連れてこられてからどれくらいの間
拘束されていたのかわからない

ふと、お腹の方を見ると
妊婦のように大きく
膨れ上がっている事に気づいた

『My Sogamin's Pregnancy!』

理解が追い付かないが
人型宇宙人が私の中で大量に
中出していたことを思い出した
そのせいかもしれない…

意識がはっきりしないまま
ポーツとしてしていると
いきなりズブっ！と
何かが膣に挿入された

『My Sogamin!』

お腹で隠れて見えないけれど
何かが私の中に入ってきてる!?



うねうねと動くソレは
私の中をねっとり責め立てる
腔壁をぞりぞりと
なぞるように動く
なんだか切ない

「ふう…ふう…んほああ
…なんでもっとッ…」

私の腔から汁が
あふれ出てくると、
動きが早くなる

「ふうん…あう
…や、やうん…
あ、あいらららんはー」

「あうん…あうん…あうん…」

触手から媚薬効果のある
分泌液が出てるのか、
体が火照るように熱い

スズ

くちゅ
ちゅぽ



子宮が疼く
膣からよだれがダラダラと
垂れてくる……

頭の両側にある小さい穴から
定期的にガスのようなものが
噴出しソレを嗅ぐたび、
頭がトローンと溶けたように
気持ちよくなる

「ふああ……あらまが、
ふわってなってるう……
な、なんも考へ
らんなくなちやうう……」

いきなり動きが激しくなる
ジュプ！ジュプ！ジュプ！

「はあああツツツ!!!らめーらめえー!!
おか、おかしくなっちゃッ……!!」

スズ

ちゅぽ

くちゅ



「あっあっあっ!!!
くっっっ…イクラッッッ!!!
んはぁぁぁぁぁッッッ!!!」

ビュックク! ビュックク!
と勢いよく私の中に
触手が体液を出してきた

体液を出し終えた触手は
ヌポッ! っと
マ○コから抜け
どこかへ行ってしまった

「んはぁぁぁぁぁッッッ!!!」

触手が抜けると同時に
噴水のように潮が吹き出た



触手が去ってから
しばらくすると
お腹が苦しくなってきた

「はッ！はッ！
な、何か生まれる!!
く、苦しい……!!!」

「はっはっはっ……
はっはっはっ……ううッッ!
うあああああ!!!」

ぶびゅッ！ズルズル

「はあああ……」

卵が私の子宮からいくつも出てくる

産み落とされた卵を丁寧
触手が運んでいく
私は異星人の苗床として
ここに連れてこられたのだ……



ここから私は出られるのか
地球は今どうなっているのか
心配事も快樂の中に沈んでいく
何も心配しないで
身をゆだねていればいいんだ

こんなにも絶望的な状況なのに
どうしてか不安がない

また、しばらくしたら
種付け用の触手が来て
私の子宮に体液を出す
お腹が大きくなったら
卵を産む、その繰り返し……

快樂に満ち満ちた中、
私は眠りについたら……



気づくと今までの事が夢であったかのようにベッドで寝ていた
今までの事は夢だったのか、
それともこれが苗床で眠りについている私の
夢なのかわからない・・・

なぜ異星人が私を地球に返したのかわからないが
私の中で何かがジュクジュクと育っている・・・

トナリ



【エピローグ】
今日も地球は守られた・・・
私もすっかり昇進して女性部隊をまとめる指揮官だ
今回も新しい新人隊員が入ってくる

今までの経験の中で得られた
『絶望の中でしか味わえない快楽』を
是非今回の子たちにも味わってほしい・・・

